

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第62集

唐 沢 古 墳 群

浜 松 市

令和元年度～2年度畑地帯総合整備事業
(担い手支援型) 三ヶ日みかんの里地区の農地造成工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2021

静岡県埋蔵文化財センター



1 唐沢1号墳 遠景（浜名湖を望む）



2 唐沢1号墳 出土遺物

序

静岡県埋蔵文化財センター調査報告第62集として『唐沢古墳群』をここに刊行します。

唐沢古墳群は浜名湖北岸にある弓張山地から東に延びる丘陵の南斜面、浜松市北区三ヶ日町日比沢に所在します。

この地は、愛知県との県境となる本坂峠の東に位置し、現在の国道362号線、かつての姫街道を見下ろす交通の要衝地にあたります。

周辺の丘陵上は、みかん畑として利用されていますが、かつては数十基に及ぶ古墳が存在していたといわれていました。

現在、唐沢古墳群では、2基の古墳が確認されており、そのうち1基が農地整備事業の範囲内にあたることから、2019年度より記録保存のための埋蔵文化財発掘調査を実施することになりました。

調査の結果、直径約9mの円墳で、横穴式石室を埋葬施設とする古墳が確認されました。

横穴式石室は盗掘や開墾などにより天井や入り口部分が破壊されていましたが、石室の形は胴張りを呈し、長さ約4m、幅1.2m、高さ1.2mの規模を有していることが判明しました。また、石室の形から三河地域との類似性を指摘することができます。

古墳は石室の構造や副葬品から少なくとも7世紀後葉に築造され、2時期の埋葬時期を示している可能性があります。

このほか、墳丘内には石が円弧状に並べられており、横穴式石室の構築と墳丘構築が一体となって築造されていることを示す事例として貴重な成果といえます。

本書が研究者のみならず、県民の皆様幅広く活用され、地域の歴史を理解する一助になることを願います。

最後に発掘調査ならびに本書の作成にあたり地元の皆様、静岡県西部農林事務所、浜松市教育委員会の関係機関各位に多大な御理解と御協力をいただきました。さらに多くの方々から御指導・御助言をいただき、ここに心よりお礼申し上げます。

2021年2月

静岡県埋蔵文化財センター所長
酒井 敏明

例 言

- 1 本書は静岡県浜松市北区三ヶ日町日比沢ほかに所在する唐沢古墳群からさわの埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は畑地帯総合整備事業（担い手支援型）三ヶ日みかんの里地区の農地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として静岡県西部農林事務所の依頼を受け、静岡県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 本調査の期間及び面積は以下のとおりである。
現地調査：令和元年7月～令和2年3月 調査面積 625 m²
資料調査：令和2年8月～令和3年3月
- 4 調査体制（所属等は調査当時のものである）。
令和元年度
所長 酒井敏明 次長兼総務課長 中野克彦 調査課長 中鉢賢治 総務班長 土戸美樹
調査班長 溝口彰啓（調査担当）
令和2年度
所長 酒井敏明 次長兼総務課長 中野克彦 調査課長 中鉢賢治 総務班長 島田真紀
主査 井鍋誉之（調査担当） 主査 大森信宏（保存処理担当）
- 5 本書の執筆は、4章をバリノ・サーヴェイ株式会社がを行い、それ以外は井鍋が行った。
- 6 本書の編集は静岡県埋蔵文化財センターが行った。
- 7 発掘調査における業務委託は以下のとおりである。
発掘調査支援業務委託：株式会社 国際文化財
整理作業・保存処理業務委託：株式会社 イビソク
炭化材同定及び放射性炭素年代測定業務：バリノ・サーヴェイ株式会社
- 8 調査にあたり、以下の方々から御指導・御助言を賜った。厚く御礼申し上げます。
井口智博 田村隆太郎 中嶋郁夫（敬称略）
- 9 本報告書に係る出土遺物及び実測図、写真等の記録は、静岡県埋蔵文化財センターで保管している。

凡 例

- 1 本書で扱う横穴式石室に関わる用語については、第8回東海考古学フォーラム三河大会の概念規定（小幡・近藤 2001）を援用した。側壁の呼称は、奥壁側からみて左壁、右壁とした。
- 2 掲載遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、表、図版の番号は一致する。
- 3 本書で扱う座標値は世界測地系に準拠し、レベル数値は海拔高である。
- 4 挿図中で扱う遺物図の縮尺は、土器 1/3、金属製品（刀身 1/4、鉄鏝等 1/2）とした。
- 5 本書で扱う出土須恵器については遠江編年を用いた。

目 次

巻頭図版

序

例 言

凡 例

1 章 調査概要	
1 節 調査に至る経緯	1
2 節 調査の方法と経過	2
2 章 遺跡の環境	
1 節 地理的環境	5
2 節 歴史的環境	6
3 章 調査の成果	
1 節 確認調査	9
2 節 墳丘の構造	10
3 節 埋葬施設の構造	17
4 節 副葬遺物	19
4 章 自然科学分析	
1 節 炭化材同定	25
2 節 放射性炭素年代測定	28
5 章 総括	
1 節 まとめ	31

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図 唐沢古墳群の位置図	1	第12図 SX02 実測図	16
第2図 唐沢古墳群の立地環境	5	第13図 石室展開図	17
第3図 唐沢古墳群の周辺道路	6	第14図 石室検出状況図・基底石検出状況図	18
第4図 確認調査トレンチ配置図	9	第15図 床面遺物出土状況図	19
第5図 調査前地形図	10	第16図 墳丘・周溝内出土土器1	20
第6図 調査区全体図	11	第17図 墳丘・周溝内出土土器2	21
第7図 墳丘図	12	第18図 石室床面出土土器	22
第8図 墳丘土層断面図	13	第19図 石室床面出土金属製品	24
第9図 側壁主軸トレンチ土層断面図	14	第20図 分析試料採取位置図	26
第10図 墳丘内石列検出状況図	14	第21図 暦年校正結果	29
第11図 墳丘・周溝内遺物出土状況図	15	第22図 墳丘盛土と石室の関係	31

挿表目次

第1表 現地調査工程表	4	第4表 出土土器計測表	23
第2表 資料調査工程表	4	第5表 樹種同定結果	25
第3表 遺跡地名表	7	第6表 放射性炭素年代測定結果	29

挿写真目次

写真1 バックホウによる表土除去作業	2	写真6 土器実測作業	3
写真2 人力による石室内掘削作業	2	写真7 落久保銅鐸出土地(東より)	7
写真3 古墳の解体作業	2	写真8 西山古墳(南より)	7
写真4 土器接合作業	3	写真9 炭化材	27
写真5 土器復原作業	3		

写真図版目次

巻頭図版 1 唐沢1号墳 遠景(浜名湖を望む)	図版7 1 墳丘検出状況(南西より)
2 唐沢1号墳 出土遺物	2 天井石検出状況(北西より)
図版1 1 調査前状況(北東より)	3 石室検出状況(南より)
2 調査前状況(南より)	4 開口部遺物出土状況1
図版2 1 表土除去後の状況(南より)	5 開口部遺物出土状況2
2 周溝検出状況(奥壁側)	図版8 1 石室床面遺物出土状況(南より)
3 周溝検出状況(左壁側)	2 大刀出土状況(南東より)
4 遺物出土状況1	3 須恵器坏身出土状況(南東より)
5 遺物出土状況2	4 鉄鏃出土状況(東より)
図版3 1 外護列石検出状況(北東より)	図版9 1 右壁検出状況(南東より)
2 周溝内竪検出状況(南東より)	2 左壁検出状況(南西より)
図版4 1 墳丘内石列検出状況1(北西より)	図版10 1 基底石検出状況(南より)
2 墳丘内石列検出状況2(北東より)	2 墓竈検出状況(南より)
図版5 1 東西墳丘土層堆積状況(南より)	図版11 出土遺物1
2 奥壁側 墳丘土層堆積状況(西より)	図版12 出土遺物2
図版6 1 右壁側 墳丘土層堆積状況(南より)	
2 左壁側 墳丘土層堆積状況(南より)	

1 章 調査概要

1 節 調査に至る経緯

静岡県浜松市北区三ヶ日町は、県西部の浜名湖北岸にあたり、江戸時代は本坂通（姫街道）の宿場として知られ、近年は「三ヶ日みかん」の生産地として著名である。現在の三ヶ日町は東名高速道路と新東名高速道路が連絡道で接続されたことにより、東名高速道路三ヶ日ICを活用して、みかん狩りをはじめとした大都市圏との交流が促進されている。また、特産品のみかんや観光施設を活用した地域振興が盛んに行われている。

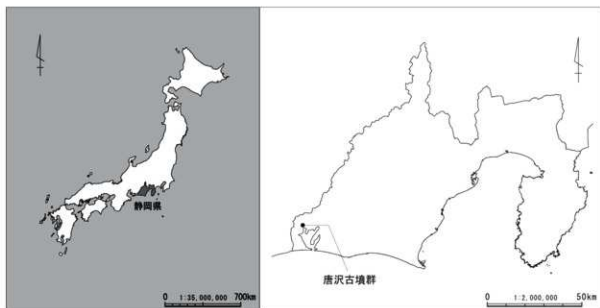
三ヶ日みかんの圃地は、斜面地が多く、農道も狭小で耕作やみかんの搬出に大きな労力を要しているとともに用水源も乏しく、灌漑や防除に必要な用水は天水に頼っている状況であった。

今回の畑地帯総合整備事業（担い手支援型）三ヶ日みかんの里地区の農地造成工事は、畑地灌漑や農道等を整備し、農産物の品質や生産効率を高めるとともに担い手農家の農地集積を図り、将来を担う人材を育成することを目的として事業が計画された。

この事業計画予定地内に周知の埋蔵文化財包蔵地である唐沢古墳群が含まれることが判明し、少なくとも1基の古墳が存在することが知られていた。事業予定地が広大であるため、複数の古墳が存在する可能性があることから平成29年度に静岡県教育委員会文化財保護課による試掘確認調査が実施され、その結果、事業予定地内において古墳が1基確認された。

この試掘確認調査の結果をもとに県西部農林事務所との間で埋蔵文化財の取り扱い協議を実施し、記録保存のための埋蔵文化財発掘調査を行うこととなった。併せて静岡県埋蔵文化財センターが令和元年度に現地調査、令和2年度に資料調査を実施する運びとなった。

なお、事業経費の内訳は西部農林事務所分80%、農家負担分20%としていることから、静岡県農地整備課、西部農林事務所と協議のうえ埋蔵文化財発掘調査に係る調査経費の農家負担分については文化財保護担当部局で負担することになった。



第1図 唐沢古墳群の位置図

2節 調査の方法と経過

1 調査方法

調査区の設定 本発掘調査を実施するにあたり、調査対象地に国家座標軸（世界測地系）に基づき、5 m間隔のグリッドを設定した。基点は、調査区の北西隅（X = 131530 Y = 89640）とし、石室を検出した段階で石室の主軸に合わせた杭を打設した。

表土掘削 唐沢古墳群が存在する丘陵は、南側に向かって低く傾斜している斜面である。バックホウのバケットは平爪を用い、大型石材に注意しながら現地表から厚さ平均0.5 mの表土及び樹木の抜根を行った。バックホウの使用は墳丘の外側のみとし、墳丘上は人力で行った。排土や除去した樹木は事業予定地内に仮置きした。

遺構検出・掘削 表土除去後、人力で墳丘の精査、周溝の検出作業を行った。周溝を検出したところで、サブトレンチを設定し、石室構造、周溝の規模、断面状況の把握につとめた。

墳丘上は礫が多く、墳丘裾の列石や墳丘内石列、指標石の存在に留意しながら慎重に検出作業を行った。石室内は転石が多く、特に開口部は盗掘等により破壊が及んでいた。これらの石を人力で除去し、側壁が残存している状況まで掘り下げ、床面は2面確認した。

遺構測量 墳丘図は、外護列石が検出された段階の状況図、墳丘内石列が検出された段階の墳丘図を作成した。石室展開図の作成は、石室主軸を基準に縮尺20分の1を基本とした。図化は写真測量により行い、必要に応じて補測作業を実施した。

石室開口部周辺から出土した遺物は1点毎に記録をとり、石室内及び床面からの遺物は出土状況図を作成し、個別Noを付けて取り上げを行った。

古墳の解体 古墳の解体作業については人力で行い、側壁の基底石を検出した段階で平面図を作成した。墳丘盛土も地山まで掘り下げ、石室掘り方、墳丘基底面の図を作成し、完掘した。

写真撮影 遺構等の写真撮影はフルサイズのデジタルカメラを用いた。高所からの撮影は、高所作業車、UAVを用い、遺跡の全景写真、周辺地形の遠景写真を撮った。



写真1 バックホウによる表土除去作業



写真2 人力による石室内掘削作業



写真3 古墳の解体作業

2 調査の経過

発掘調査 現地調査は令和元年度9月末より事務所設置、資機材運搬、草刈り等を行い、10月より本格的な作業に着手した。

10月初旬は調査前地形測量を行ったのちにバックホウ0.25㎡による表土除去を行った。併せて切り株や下草についてもバックホウで除去し、10月下旬まで行った。

表土除去後は人力で墳丘、周溝の精査を行い、南北東西方向にトレンチを設定し、墳丘構造、石室構造を把握した。

12月からは、墳丘中央部に石室石材が崩落していたため、主体部にトレンチを設定し、石材を除去しながら、残存する奥壁、側壁を確認した。特に石室開口部付近は攪乱が及んでいたが、床面は2面確認した。2次床面では須恵器、大刀をはじめとした遺物が出土した。これらの出土状況図を作成後、石室の展開図、断面図を作成した。

12月後半からは奥壁及び側壁の解体作業を実施するとともに墳丘盛土の掘削作業を行い、完掘した。12月末には現地調査を終了した。

遺跡報告会 唐沢古墳群の調査では現地説明会を開催することができなかったが、令和2年11月7日に実施した埋蔵文化財センター主催の遺跡調査報告会において、唐沢古墳群の調査成果を報告し、成果の連報伝達に努めた。

整理作業・保存処理 唐沢古墳群に係る墳丘図、石室展開図などの図面を整理する基礎的な作業は現地作業と並行して行った。本格的な整理作業・保存処理作業は、令和2年度に株式会社イビソクに業務委託し、当該埋蔵文化財センターにおいて実施した。

8月より整理作業に着手し、土器の注記作業、接合・復原作業をおこなった。9月以降は記録類の編集作業、土器実測・トレース作業、遺物撮影等を行った。金属製品の保存処理及び修復作業も併せて行った。

10月以降は、記録類と出土品の検討作業をすすめ、報告書に掲載する遺構図、遺物図を作成した。このほか、唐沢古墳群から出土した炭化材についての樹種同定・年代測定業務はバリノ・サーヴェイ株式会社が行った。

令和3年2月に調査報告書（本書）を刊行し、すべての作業を完了した。



写真4 土器接合作業



写真5 土器復原作業



写真6 土器実測作業

第1表 現地調査工程表

		実績									
		6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
現 地 調 査	調査準備等										
	作業準備等										
	準備・撤収工										
	表土等除去										
	遺構検出										
	積石関連掘削										
	土体部掘削										
	床面精査・検出										
	石室等解体										
	その他の作業										
	基礎整理										
道路調査等作業											

第2表 資料調査工程表

		実績									
		6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
資 料 調 査	調査準備等										
	作業準備等										
	資料整理										
	報告書発行										
	保存処理										
自然科学分析											

2章 遺跡の環境

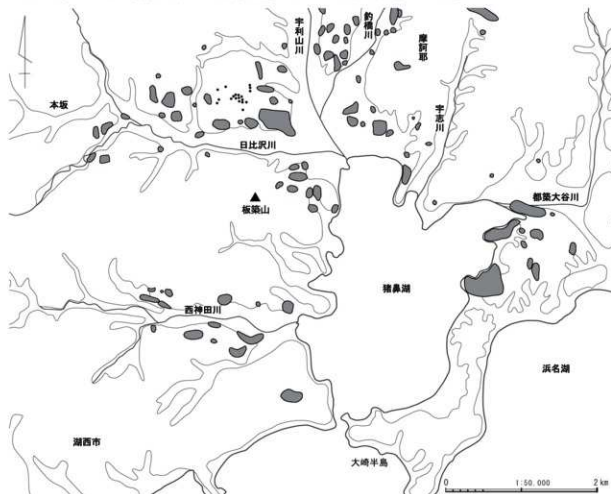
1節 地理的環境

唐沢古墳群の位置 唐沢古墳群が所在する浜松市北区三ヶ日町は、静岡県西部に位置する。南東には浜名湖があり、北は赤石山地の南縁にあたる。浜名湖は、69.3 km²、最大深さ約12 mの汽水湖である。一帯は、県立自然公園かつ県立名勝指定地でもある。浜名湖奥にある猪鼻湖は浜名湖の支湖で、大崎半島によって浜名湖と仕切られており、三ヶ日町は猪鼻湖に面している。

浜名湖の北岸から西岸にかけては湖西連峰が南北に延び、現在は静岡県と愛知県の県境となっている。南北に連なる湖西連峰には三ヶ日町本坂峠(320 m)、湖西市多米峠(265 m)など標高の低い山々があり、特に本坂峠は、愛知県豊橋市と三ヶ日町を結ぶ峠であり、江戸時代には姫街道が通っている。

姫街道は正式には本坂通と呼ばれ、磐田見付宿から三ヶ日宿、本坂峠、嵩山宿、御油宿に至る近世東海道の脇往還である。

本坂峠周辺の地質は、石灰岩などで構成され、日比沢川の開析作用により段丘面及び緩斜面が形成されている。他方、豊橋市側においては石灰岩の鍾乳洞がみられ、縄文時代に利用された洞穴遺跡もあることから、この地が古来より人々の生活基盤であったことを示すものである。



第2図 唐沢古墳群の立地環境

2節 歴史的環境

唐沢古墳群が所在する浜松市北区三ヶ日町は、奥浜名湖地域に位置し、豊かな自然に恵まれている。浜松市中心部より離れていることもあり、大規模な都市開発も少なく、旧石器時代以降、多くの遺跡、文化財が残されている。

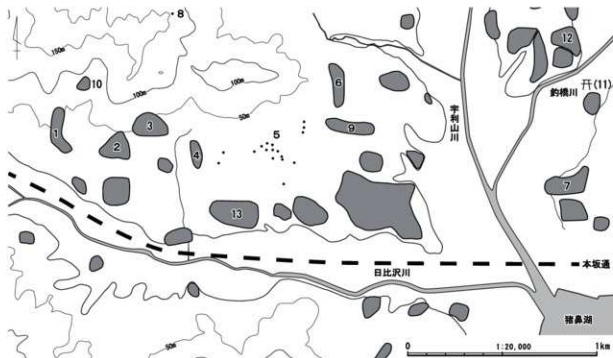
旧石器時代から縄文時代 只木遺跡は石灰岩採掘場から昭和34年に絶滅種の動物化石とともに化石人骨が確認され、「三ヶ日人」が出土した。その後、浜北区根堅からも人骨が出土し、「浜北人」として名付けられ、日本を代表する旧石器時代の人骨として多くの教科書や歴史書などで紹介されてきた。その後の分析調査により、「三ヶ日人」は、旧石器時代人ではなく、縄文時代早期のものと訂正されたが、「浜北人」は、1万4千年前の旧石器人骨と鑑定され、再評価されている。このほか愛知県東部から奥浜名湖の石灰岩地帯では、豊橋市嵩山蛇穴、行者穴遺跡などの鍾乳洞遺跡が確認されており、浜名湖北岸地域は日本人のルーツを探る上で重要な場所である。ほかにも殿加遺跡（7）は縄文時代晩期の土器や遠賀川式土器が共存しており、弥生文化導入期の遺跡として注目される。

弥生時代 弥生時代に入ると浜名湖周辺にも多くの遺跡が分布するようになり、奥浜名湖地域では銅鐸が多く出土する。特に都田川周辺は伝承を含めて12口の銅鐸が出土する全国有数の銅鐸出土地である。

一方、猪鼻湖北岸の三ヶ日町においても4口の銅鐸が発見されており、宇利山川と日比沢川に挟まれた緩やかな丘陵の北東斜面に分寸遺跡（8）、南東斜面に荒神山遺跡（9）、南西斜面に猪久保遺跡（10）が分布している。

山田銅鐸 昭和25年に発見され、梅原末治氏が調査に訪れている。高さ約97cmの突線紐4式の近畿式銅鐸で、市内最大のものとされる。紐の飾り耳は大きく、下横帯には渦巻き文がつく装飾性の高い銅鐸である。

荒神山銅鐸 2口出土しており、いずれも突線紐3式の三邊式銅鐸である。1号銅鐸のA面は縦と横



第3図 唐沢古墳群の周辺遺跡

の帯に袈裟模様がつくがB面は、横帯のみのものである。2号銅鐸は、典型的な三連式と考えられている。これら2つの銅鐸は天保9（1838）年に発見され、現在、1号銅鐸は東京国立博物館、2号銅鐸は奈良国立博物館が所蔵している。

猪久保銅鐸 突線紐4式の近畿式銅鐸で、高さ96cmと山田銅鐸と並ぶものである。昭和40年にみかん園造成中に出土し、錆を上下にし、斜面に対し、直角にして埋められたとされている。現在、銅鐸は県指定文化財に指定されている。

古墳時代 古墳は丘陵の斜面や河岸段丘の端部に造られ、浜名湖北岸地域においては、都田川・井伊谷川流域の丘陵や台地を中心に多く分布しており、4世紀後半から首長系譜をたどることができる。

6世紀後半にはいと各地に横穴式石室をもつ小円墳が造られるようになる。

浜名湖沿岸の後期古墳は浜名湖を直接見下ろす丘陵や浜名湖に流入する河川沿いに分布している。唐沢古墳群が所在する地域は、浜名湖北岸（猪鼻湖周辺）の小地域としてとらえることが可能である。

浜名湖北岸地域は、西神田川や日比沢川、釣橋川流域の丘陵・段丘上に古墳が分布し、釣地区、日比沢地区にはかつて100基以上の古墳が存在していたとされるが、大半が消滅している。これまでこの地域では、前期から中期にかけて前方後円墳や大型の古墳は確認されていない。

また、調査も少なく、その実態については不明な点が多い。しかし、見学可能な古墳として西山古墳や愛宕平古墳が挙げられる。

西山古墳 市の指定史跡であり、日比沢川北岸の段丘上に位置する。現在は、みかん園になっているが、当初は17基から構成される釣古墳群(5)内であったとされる。

石室の形態は約8mの擬似両袖式石室で、平面形はやや胴張りを呈する。羨道部分が埋没しているが、ほぼ完全な状態で残存していると考えられる。玄門部は天井石と遊離したまぐさ石が架構されている。出土遺物は明治時代に土師器や刀身片が出土したとされるが、散逸している。石室構造・規模より6世紀後半に築造されたと推定される。

愛宕平古墳 東名高速道路三ヶ日IC東側の丘陵に位置し、直径11m高さ2mの円墳である。長さ7.5mの擬似両袖式石室で、ほぼ完全な状態で残存している。平面形は胴張りを呈する。天井は弧を描く形状で、天井石と遊離したまぐさ石が架構される。出土遺物は不明であるが、須恵器、直刀、勾玉が出土したと伝えられるが、資料は散逸している。築造時期は7世紀前半と考えられる。

第3表 遺跡地名表

番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	唐沢古墳群	8	分寸遺跡
2	日比沢高砂古墳群	9	高神山遺跡
3	日比沢北山古墳群	10	猪久保遺跡
4	瀬尻古墳群	11	浜名神社神明宮
5	釣古墳群	12	橋本遺跡
6	釣北山古墳群	13	日比沢城
7	瀬原遺跡		



写真7 猪久保銅鐸出土地（東より）



写真8 西山古墳（南より）

古代の浜名郡 浜名郡には、『和名類聚抄』によれば、坂上郷、坂本郷、駅馬郷、大神郷、英多郷、贄代郷、宇智郷があり、8世紀には新居郷、津築郷があったとされる。坂上・坂本郷は三ヶ日町日比沢、英多郷は三ヶ日町岡本、贄代郷は、三ヶ日町鶴代・尾奈、宇智郷は三ヶ日町宇志、津築郷は三ヶ日町津々崎・都筑が当てられ、本坂峠から猪鼻湖周辺の狭小地域に5～6郷が密集した状態であるとされる。

古代の遺跡の状況は不明な点が多いが、三ヶ日の地は平安時代から中世にかけて伊勢神宮の荘園である御厨が置かれるなど伊勢神宮と深い関わりが注目できる。延喜式内社である浜名郡英田神社と考えられている浜名総社神明宮(11)は、浜名県主を祖先神として祭っており、本殿は、「井籠造」と呼ばれる古い建築様式である。文政7年以前の建造物で重要文化財に指定されている。近年の調査で、近接する楠木遺跡(12)では、奈良時代前半の古代瓦が大量に出土し、古代寺院の存在が指摘されている。

古代の本坂通 古代の官道は都と国府、郡家などでつながり、律令国家にとって地方支配の重要な施策であり、本坂通は三河一遠江国府間や郡家、拠点的な集落などを結ぶ官道であったと考えられる。

平安時代の本坂通に関する記述として、『日本文徳天皇実録記』嘉祥3(850)年5月15日条に承和9(842)年に橘逸勢が都で謀反を起こし、罪に問われ、伊豆へ配流される途中に板築駅で死去したとの記事がある。

板築駅は延喜式に記載されていないが、『続日本後紀』承和10(843)年10月18日条に東海道の猪鼻駅が復興された記載が見られることから、駅路の変更・改廃に伴うもので、南ルートが不安定であった場合の迂回路的な役割を果たしたであろう。板築駅の所在地は不明であるが、北区三ヶ日町日比沢付近で奈良・平安時代の土器が散布されていること、小字名からこの地が有力地の一つとされている。

戦国時代から江戸時代の本坂通 浜名湖北岸には、南北朝期の千頭峯城、浜名氏の居城である佐久城、その支城である日比沢城(12)など浜名湖の湖上交通や本坂通のおさえとして街道周辺に築かれていた。また、戦国時代には、本坂に関所が設けられ、気賀関所が設置されるまで藤藤氏が関守を勤めたという。

江戸時代に入ると徳川家康は慶長6(1601)年東海道の宿場を設定し、それに次ぐ主要道(脇往還)も整備していった。本坂通はその代表的な道筋で、通称「姫街道」とも呼ばれる。本坂通は大名家や公家の利用も多く、道筋には市野宿、気賀宿、三ヶ日宿、嵩山宿が置かれ、幕府側にとって重要な街道であったとされる。姫街道という名は俗称であり、幕末の天保年間には、「姫街道」と呼ばれていたようである。

このように本坂通は、古代においては官道、中世・戦国時代には軍事用の道路、江戸時代には東海道の脇往還として発達し、現在においても交通の要衝として機能している。

参考文献

- 三ヶ日町 1974『三ヶ日町史』
- 三ヶ日町教育委員会 1985『引佐郡三ヶ日町殿畑遺跡』
- 三河考古学談話会古墳部会 1994『東三河の横穴式石室』
- 静岡県 1995『静岡県歴史の道 姫街道』
- 細江町 1995『姫街道—細江—』(改訂版)
- 三ヶ日町教育委員会 1996『北山1号墳調査概報』
- 井口智博・石橋直也 2003「遠江西山古墳・愛宕平古墳の研究」『三河考古』第16号
- 静岡県考古学会 2003「浜名湖沿岸」『静岡県の横穴式石室』
- 浜松市博物館 2007『浜松市の銅鏡』
- 浜松市生活文化部生涯学習課 2009「姫街道を歩く」『浜松市文化財ブックレット2』
- 浜松市生活文化部生涯学習課 2009「奥浜名湖文化財探訪」『浜松市文化財ブックレット3』

3 章 調査の成果

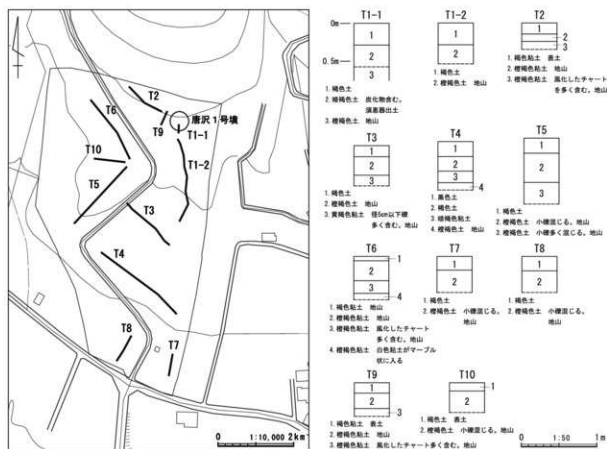
1 節 確認調査

静岡県教育委員会文化財保護課では、平成 29 年 11 月に周知の埋蔵文化財包蔵地である唐沢古墳群及びその近接地内において試掘確認調査を実施した。

1 号墳については、現況で墳丘状の高まりを確認することができ、幅 1 m 長さ 8 m にわたり、周溝状のくぼみもみられた。この状況から直径約 10 m 程度の円墳であると推測することができた。石室開口部付近で石室構築材と思われる石材が露出していることからここに 1 本のトレンチを設定した。地表下 0.6 m で石室構築材と思われる大型の石材、須恵器が出土したことからこれ以上の掘削は行わず、他の地点での古墳の存在を確認するため試掘確認調査を優先した。

1 号墳は横穴式石室墳と想定されたため、周辺で複数の古墳が群集する可能性を考慮し、比較的緩やかな斜面、西側斜面を中心にトレンチ 10 本を設定した。

掘削方法は重機及びび人力で行い、幅 1 m、地表下約 0.5 m まで掘削した。いずれも表土下は地山（橙褐色土）が表出し、古墳に関連する遺構、遺物は皆無であった。唐沢 1 号墳を除く地点ではみかん園の造成、植林による掘削が及んでいることが明らかになった。



第 4 図 確認調査トレンチ配置図

2節 墳丘の構造

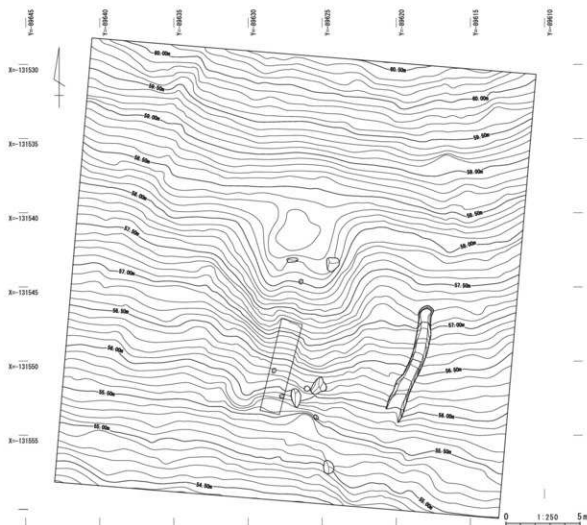
1 概要

平成29年度の試掘確認調査の結果をふまえ、本発掘調査は令和元年度に実施した。本発掘調査では古墳1基とSX01、SX02（炉穴状遺構）を確認した。SX01は墳丘上で炭化物、焼土を確認した。攪乱が及んでおり、時期は不明である。SX02は、古墳解体時に前庭部で検出されており、少なくとも古墳構築時に伴うものではないと判断される。焼土と炭化物が出土したのみで時期は不明である。

1号墳からみる景観は、南東に猪鼻湖を見通すことができ、南西には、本坂峠、眼下には、低位の段丘に分布する集落、古墳群や日比沢川をみることができたと推察できる。

調査前の現況は、山林であったが、当初から古墳とおぼしきマウンドをみることができ、石室を構成する石材は、数個点在していた。また、石材が分布する東側には長さ約8m幅1mの溝状の落ち込みが弧状を呈しており、周溝の一部として推定することができた。

調査の基本層位は、表土下が、地山（橙褐色土）であった。確認調査の結果や今回の調査で他の古墳の痕跡もみられなかったことから地形全体が削平されているとともに古墳が密集して分布する古墳群ではなかったと考えられる。



第5図 調査前地形図

調査の結果、唐沢1号墳は円墳であることが判明した。石室主軸は $N-5^{\circ}-E$ を示し、南北墳丘径8.9m、東西径8.1mでやや南北にやや長い楕円形を呈する。墳丘は奥壁側で床面から最大で1.45mの高さであり、奥壁2段目の構築時までの墳丘が残存していた。墳丘裡には大型の礎が点在していることから外護列石がつくこと、墳丘内に一部石列がみられた古墳であることが判明した。

SX01 (第7図)

墳丘南東部で炭化物・焼土を確認した。分析の結果、炭化材はマツ属複雑維管束亜属でCalAD702～881が示された。(4章参照)。分析結果をふまえると古墳構築に伴うものではないと考えられる。

墳丘土層

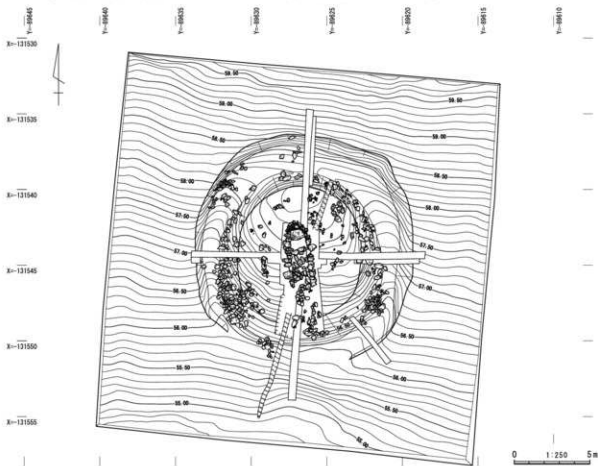
墳丘土層の確認には、北トレンチ(奥壁裏)、左壁(東トレンチ)、右壁(西トレンチ)を設定し、地山まで掘削した。また、石室解体時には、両側壁裏側に土層帯を残して掘削したことから、側壁の構築と墳丘盛土の関係性を把握することができた。

層位は、Ⅰ層：表土・流土、Ⅱ層：墳丘盛土、Ⅲ層：墓壇埋土、Ⅳ層：地山と分けた。

今回、石室構築が3工程に分離できることから側壁構築1段階(基底石設置段階)、側壁構築2段階、側壁構築3段階(外護列石・墳丘内列石設置段階)と呼称する。

(1) 墳丘北トレンチ(第8図)

奥壁裏のトレンチである。墓壇は墳丘盛土から掘りこまれている。墓壇内は赤褐色土で炭化物を含む。周溝の溝底の高さは、概ね奥壁2段目設置時の高さに該当する。奥壁2段目を構築した際にⅡ-2、4、5層のように盛土単位が細かく積まれ、炭化物がみられた。これは墳丘内石列の設置時に伴うものと考えられる。天井石設置に伴う盛土とされるⅡ-2層は厚く、しまりが弱い。



第6図 調査区全体図

(2) 墳丘東西トレンチ (第8図)

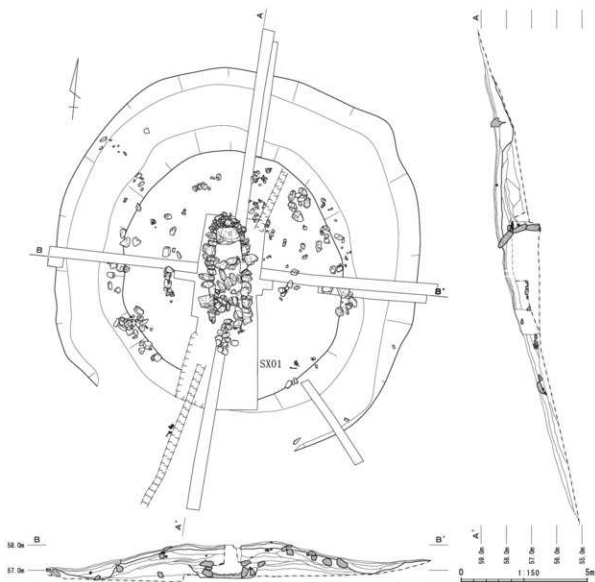
墓壇は、Ⅱ-8層の墳丘盛土をした後に掘りこまれている。Ⅱ-9層の厚さは、石室側が厚く、周溝側に向かって薄くなっており、旧表土を削平・整地したと思われる。

墳丘掘に設置された大型の礫は外護列石であり、墓壇面より上の墳丘盛土段階(側壁構築2段階)で設置されている。側壁2段目に伴う墳丘盛土はⅡ-7、14層と薄く積まれ、丁寧に盛土が施されていた。

また、墳丘中央部にある礫は墳丘内石列であり、それに伴うⅡ-1、2層の墳丘盛土は厚く、しまりが弱いことからおそらく天井石が架構された段階での造作と考えられる。

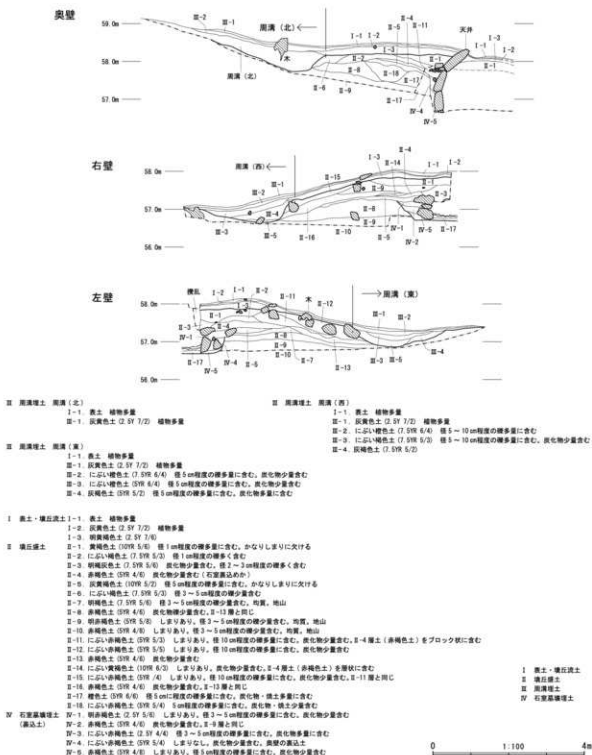
(3) 墳丘主軸トレンチ (第9図)

左壁トレンチ 左壁と主軸方向の盛土との関係をとらえるためにトレンチを設定した。石室基底面に対して墳丘盛土の基底面は 10° 低く傾斜している。この傾斜角度は、概ね側壁の目地と合致し、開口部にある大型の横長石材のあたりで同じ高さとなる。側壁の残存状況は良好ではないが、側壁の下段に対応する盛土は比較的厚く、しまりが強い。一方、側壁の上段に相当するⅡ-5層やⅡ-2層は、礫を多く含み、しまりは弱い。

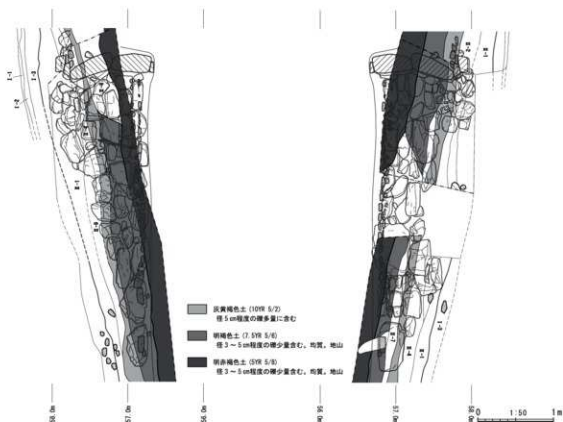


第7図 墳丘図

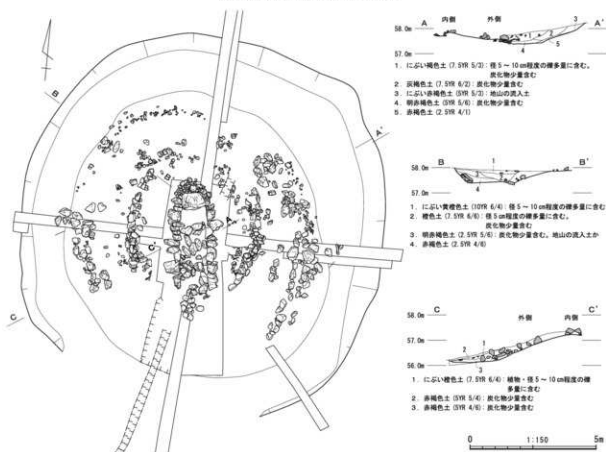
右壁トレンチ 右壁と主軸方向の盛土との関係をとらえるためにトレンチを設定した。石室基底面に対して墳丘盛土の基底面は左壁と同様に 10° 低く傾斜している。傾斜角度は側壁の目地と合致する。II-7、17、18層の盛土の厚さはそれほど変わらないが、ブロック単位で積まれている。この部分は側壁が良好に残存していないが、石材の大きさや目地の通り具合から側壁の構築単位を示す可能性を指摘しておく。側壁4段目までの目地は大型の石材を用いて比較的通っており、奥壁寄りの側壁は、小型の石材を用い、天井石設置の高さ調整や石室の長さの調整が図られていることがうかがえる。



第8図 墳丘土層断面図



第9図 側壁主軸トレンチ土層断面図



第10図 墳丘内石列検出状況図

(4) 2重の石列をもつ小墳丘 (第10図)

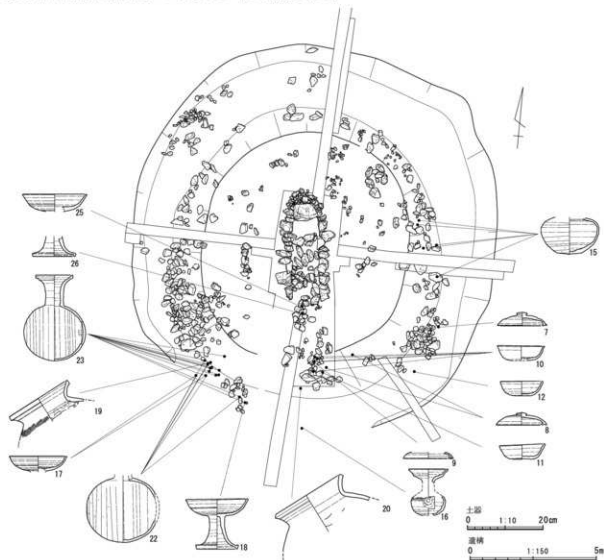
第10図は良好に墳丘内石列が検出された段階の実測図である。側壁・奥壁の残存状況、墳丘盛土の状況から天井石を設置した段階に2重の墳丘内石列が設置されたと考えられる。

内側の墳丘内石列 奥壁側の石の並びは散漫な状況であるが、側壁から続く石列の輪郭をたどることができる。両側壁側の墳丘内石列は良好に残存しており、右壁側では、列石は2段から3段ほど積まれており、長さ5m幅0.9mの範囲で弧状に検出された。

左壁の石列は右壁と同様に2段から3段ほど積まれており、長さ4m幅0.7mの範囲で弧状を呈していた。

内側の墳丘内石列は径5.5mのやや南北に長い楕円形を呈していた。この形は石室構築を主体とした結果であろう。石室の開口部は残存していないため不明であるが、この石列の並びは石室の先端開口部もしくは石室目地の変換点に向かっていく可能性が高い。

外側の墳丘内石列 検出時において弧状に石材が分布しており、外護列石の下部にあたる石材の可能性も考慮したが、墳端より約0.5m内側にあること、墳丘内に含まれ、精緻な並びが認められたことから墳丘内石列とした。開口部付近は、攪乱が及んでいるため、前庭側壁や墓道等の状況は不明であるが、墳丘内石列は開口部に向かって延びていたと推測される。



第11図 墳丘・周溝内遺物出土状況図

右壁側の列石は墳丘の南西側で長さ3mの範囲で検出された。積まれた痕跡はなく、内側の列石と比べるとやや散漫な状態であるが、石材の大きさは内側の墳丘内石列よりも大型の石材を用いている。奥壁側は小型の石材が用いられ、弧状を描いている。左壁側の長さ5mの範囲は石列を明確に把握することができ、積まれた様子はうかがえない。

周溝 周溝は、南側を除いて確認できた。周溝の先端は途切れているため不明である。また、墓道についても確認することができなかった。周溝幅は1.8～3.5mで、北側の断面ではL字状を呈し、検出面から0.5mと比較的深い。

一方、西側、東側は検出面から0.3mと浅いが、緩やかに平底を呈する形状である。東側の周溝から比較的多くの須恵器片が出土した。

(5) 遺物出土状況 (第11図)

墳丘内し周溝内から16点の須恵器を図示することができた。そのうち高坏の坏部(25)、脚部(26)の2点については石室開口部の上面から出土した。石室開口部付近は、破壊されており、側壁や閉塞構造をとらえることはできなかったため、この2点が儀礼行為に伴うものとは考えにくく、元位置ではないと考えられる。

それ以外の須恵器は、周溝内から出土した。東側の周溝から西側の周溝の南半部にかけて出土しており、フラスコ型瓶2点、高坏2点、平瓶2点、甕1点、摘蓋3点、坏身3点、小型長頸壺1点である。

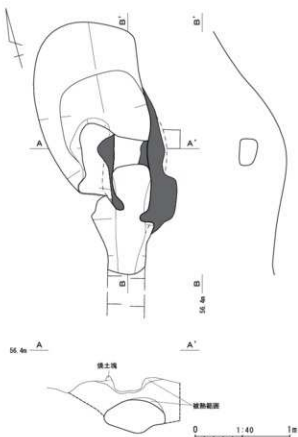
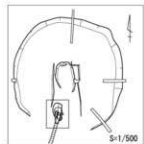
とくにフラスコ型瓶(22)(23)、高坏(17)(18)それぞれ2個体が西側の周溝先端部付近から出土した。

一方、坏蓋類は東側の周溝からは摘蓋(7)(8)(9)、坏身(10)(11)(12)がそれぞれ3個体分が出土した。いずれの土器からも意図的に破砕されたような痕跡は確認されなかった。

石室開口部付近が攪乱により側壁、床面が残存していないことからこれらの遺物は攪乱時に持ち出され、周溝内に投棄されたと推測される。

SX02 (第12図) 古墳を解体、墓壙を掘削した際に開口部付近からSX02が検出された。楕円形を呈し、赤く被熱した範囲が認められた。遺物は出土していないが、炭化材が周囲から出土した。トンネル状を呈し、掘り込みが急激に立ち上ることから炉穴の可能性がある。

4章の自然科学分析ではSX02出土の炭化材の樹種同定及び年代測定(試料No.5)を実施し、樹種は、マツ属複雑管束亜属で暦年較正年代は3875～3703calBPとされた。



第12図 SX02実測図

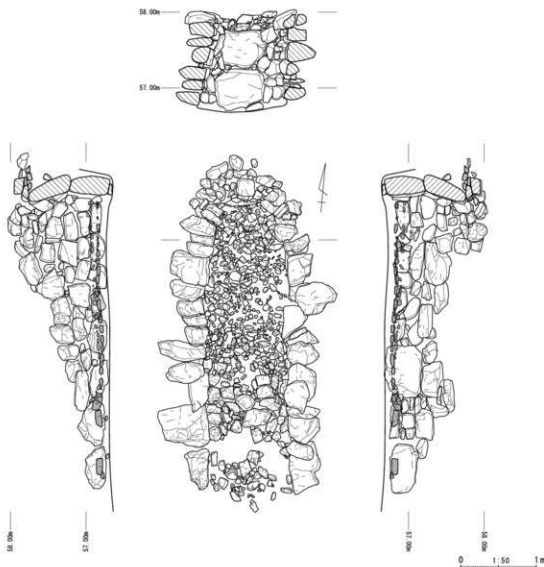
3節 埋葬施設の構造

1 概要

唐沢1号墳の埋葬施設は、横穴式石室であり、開口部は欠失しているものの胴張りを呈する無袖式石室と考えられる。石室残存長3.8m幅1.2m残存高さ1.2mである。石室主軸は座標北に対して5°東にとる。壁体の持ち送りはそれほど顕著ではない。開口部は攪乱が及んでいたため、閉塞石の状況は不明であった。

奥壁 奥壁は2枚で構成され、横長長方形形状の石材で構成される。下段の石材は直立に据えられ、上段の石材は、やや斜めに据えられ持ち送られていた。奥壁側では原位置を保っていないものの横長の石材である天井石が1石が架けられ、周囲には人頭大の礫から拳大の礫で構成される間詰石がみられた。

天井石 天井石は側壁幅を覆うほどの大型の石材ではなく、奥壁の石材と同規模のもので、周辺に散在していた大型石材や石室規模から勘案すれば、4～5石は架けられていたと推定される。



第13図 石室展開図

右壁 側壁の線形は奥壁に向かって緩やかに湾曲し、窄まっていく。基底石は、8石で構成され、開口部に向かうほど横長の大型石材を使用している。上段の側壁の遺存状況は良好ではないが、石室目地は奥壁から斜め下に向かって通っており、上段にいくに従い、小型の石材が積まれている状況であった。

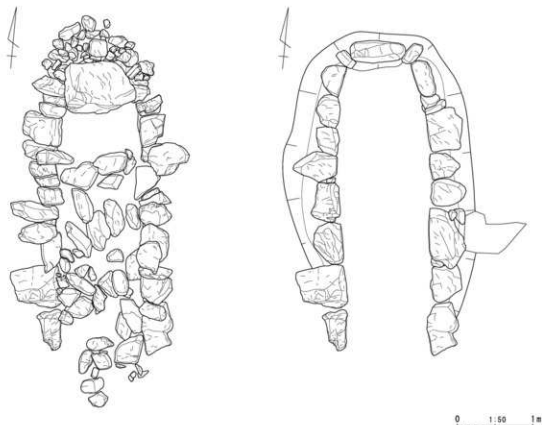
左壁 側壁の線形は右壁と同様に奥壁に向かって緩やかに湾曲し、窄まっていく。基底石は、8石で構成され、奥壁から数えて6石及び8石は他の基底石より大きいこと、床面の敷設状況からこれらの石は石室構築に係る指標石として設置されたものと考えられる。上段の側壁の遺存状況は良好ではないが、側壁は水平に積まれ、奥壁側ほど小型の石材を用いて積まれている状況であった。

床面 床面は2面確認した。1次床面は、奥壁から約3mの範囲（基底石から7石）まで扁平な石を用い、丁寧に敷かれていた。この1次床面から遺物は出土していない。

2次床面は、奥壁から2.5mの範囲（基底石から6石）まで径5～10cm前後の小礫を用い、敷かれていた。7石部分は1次床面の敷石が表出していたことから敷石の違いにより埋葬空間の区別が意図されていたと考えられる。このほか棺台や枕石に相当する石は確認されなかった。

墓壇 墓壇は奥壁2段分に相当する深さから掘り込まれ、側壁側では深さ0.3mから掘り込まれていた。平面形は長方形を呈する。個別の基底石を据え付けるための痕跡や掘り込みはみられなかった。

石室床面遺物出土状況（第15図） 出土した遺物はすべて2次床面から出土し、1次床面からは確認されなかった。副葬品の内訳は須恵器、大刀、鉄鏃、刀子である。摘蓋（24）は、奥壁から2.4mの石室中央付近で逆位の状態で出土した。長頸壺（27）は破片でまとまって出土した。大刀（28）は切先を下に向け、右側壁に立て掛けられた状態で出土した。追葬時に片づけられ、側壁に立てかけられたと想定できる。大刀の鏃（30）は開口部寄りでも出土した。尖根式片刃箭鏃（34）は左壁寄りの開口部付近でも出土した。鉄鏃の閥部（36）は奥壁寄りの右壁側から出土した。



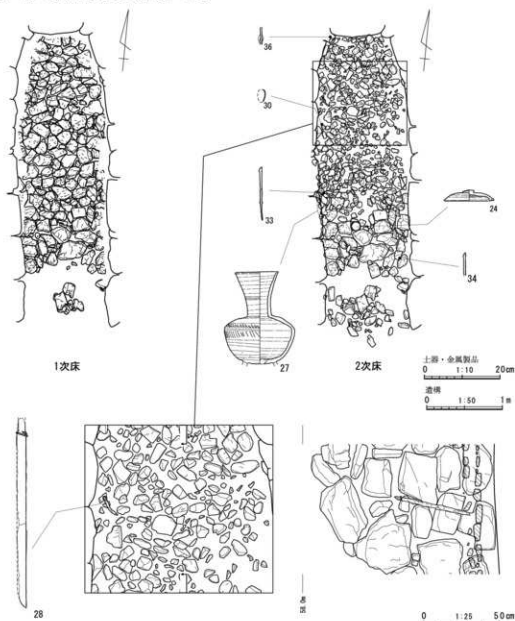
第14図 石室検出状況図・基底石検出状況図

4節 副葬遺物

1 概要

唐沢1号墳から出土した遺物は、遺物収納箱に換算して2箱の出土で、大部分が、須恵器である。出土位置を考慮すると周溝・石室開口部周辺から多くの須恵器片が出土している。これらは石室開口部周辺は側壁が崩落し、擾乱等の後世の影響を受けているため、石室内にあった多くの遺物が外へ持ち出されたと推測される。遺物の内訳として須恵器坏身、摘蓋が多く、次いでフラスコ型瓶、高杯の破片が多い。これらの須恵器は湖西窯産である。

石室床面からは、完形品の須恵器摘蓋、高台を欠失した長頸壺が出土しているが、周溝等から出土している須恵器と比べてもそれほど時期差は認められない。このほか金銅装の貴金具を有する大刀、鉄鍔、刀子が出土している。人骨等は確認されなかった。



第15図 床面遺物出土状況図

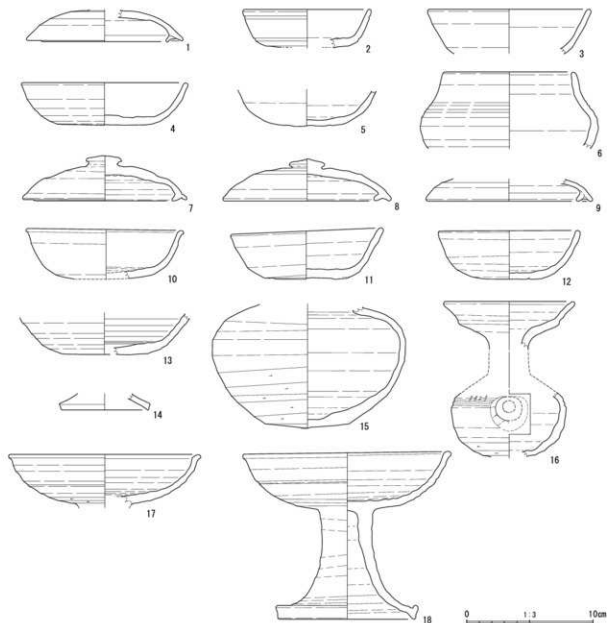
2 土器

1は摘蓋である。やや丸みを帯びる。摘みは欠失しており、天井部にはヘラケズリ調整が残る。遠江IV期後半であろう。2は、小型高坏の坏部としたが、坏の可能性も否定できない。口縁部、屈曲部にそれぞれ1条の沈線がつく。高坏の坏部であれば遠江III期末の可能性もある。

3～5は、坏身である。3は口径13.0cm、器高(3.5)cmである。体部は直線的に延びる。4は口径(13.2)cm、器高3.4cmである。緩やかに立ち上がり、底部は平坦である。ヘラケズリ後、ナデが施される。遠江IV期後半であろう。5は、口縁端部は欠失しているが、底部は丸みを帯びる。

6は短頸壺である。口径は10.6cmで体部最大径は上位に位置する。口縁部は外反しながら立ち上がる。屈曲部には稜がつく。全体的に摩耗しており、軟質である。色調は灰白色である。口縁部はナデ調整、体部は、ケズリ調整のちナデ調整が施される。遠江III期末の可能性もある。

7～9は、摘蓋である。7は受け部径(13.0)cm、器高3.6cmである。天井部外面上位は、ヘラケズ

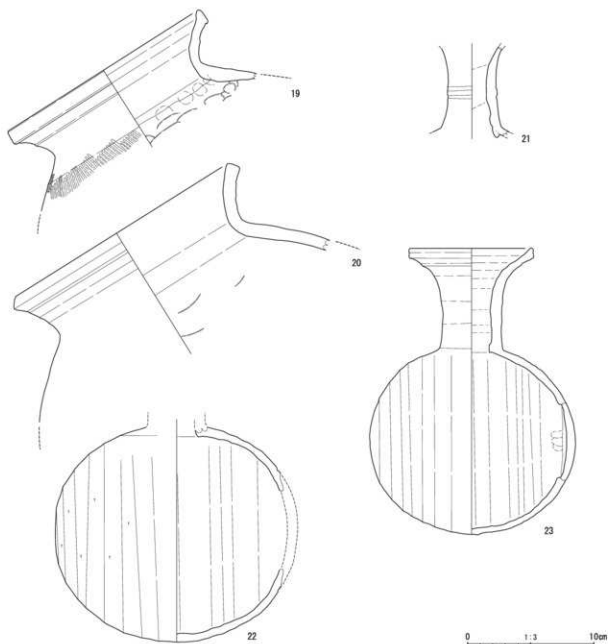


第16図 埴井・周溝内出土土器1

りののちにナデ調整が施され、下位はナデ調整が施される。その境には段差が明瞭に残る。暗緑色の自然釉がよく付着する。受け部端部にも段差が明瞭に残る。8は、受け部径(13.4)cm、器高3.3cmである。天井部外面は、暗緑色の自然釉、窯壁の一部が付着し、外面の調整は不明である。7、8は遠江IV期後半であろう。

9は口径9.9cmとやや小さいことから長頸壺の蓋の可能性もある。摘みは欠失しているが、天井部はヘラケズリが残る。

10～12は、坏身である。10は口径12.5cm、器高4.0cmである。体部は丸みを帯び、口縁端部は短く外反する。体部下位にはヘラケズリが残る。11は口径12.2cm、器高4.1cmである。底部から体部にかけてやや屈曲が強い。体部下位にはヘラケズリ調整の後にナデ調整が施される。



第17図 墳丘・周溝内出土土器2

12は口径11.3cm、器高3.8cmである。形状はやや丸みを帯びる。ロクロ回転は右方向で底部ヘラ切り後、ナデ調整が施される。底部には幅2cmのハケ状工具による痕跡が残る。10～12は遠江IV期後半であろう。13は、口縁部は欠失しているが外方に延びやや口径が大きい。外面はナデにより調整される。

14は、小型高坏の脚部である。端部は三角形で外面は自然釉が付着する。遠江IV期に含まれよう。

15は長頸壺の体部である。体部径は15.3cmで、平底である。肩部は丸く、体部下半から底部にかけてケズリ調整が施される。肩部には自然釉がわずかに認められる。遠江IV期の範疇に含まれよう。

16は、甕である。口径10.4cm、口縁部中位では屈曲し、外方に延びる。頸部は失われているが、口縁部と体部は同一個体であると考えられる。体部は、やや丸みを帯びるものの体部の最大径は口径よりやや小さい。下位にはヘラケズリ調整が残り、丸底である。屈曲部には2条の沈線が巡り、その上位に櫛刺突文がつく。注口部は屈曲部下位で取りつき、ナデにより痕跡が残る。自然釉は口縁部内面、体部上位に認められる。遠江IV期後半であろう。

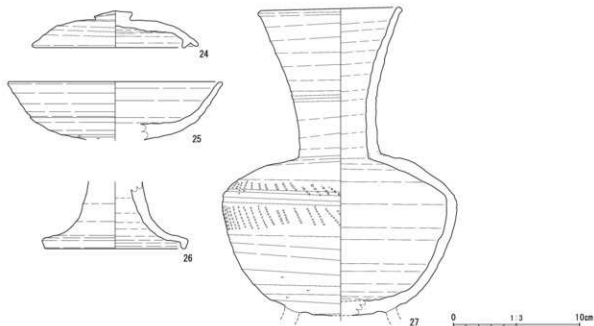
17、18は高坏である。17は皿状を呈する。口縁部は短く外反する。外面下位にはヘラケズリ調整が認められる。18は口径16.6cm、高さ13.3cm、脚部径11.0cmである。皿状の坏部で口縁部は短く外反する。屈曲部には浅い沈線が1条巡り、坏部下半はヘラケズリ調整が残る。脚部は八字に広がり、端部は三角形状を呈する。全体的に摩耗が及んでいる。17、18は遠江IV期後半であろう。

19は平瓶である。口縁端部は三角形状を呈する。頸部中位には、ロクロ成形による段差が認められる。口縁部から体部外面にかけて暗緑色の自然釉が付着する。体部外面はタタキ目が斜位に残る。内面は、体部と頸部の境に粘土紐接合痕が観察され、体部には指頭圧痕が明瞭に残る。遠江IV期であろう。

20は平瓶である。口縁端部は稜をもち、1条の沈線が巡る。外面はタタキ目が残る。外面は自然釉が付着する。遠江IV期であろう。

21はフラスコ型瓶の頸部でやや細い印象を受ける。中位に3条の沈線がつく。外面に暗緑色の自然釉が付着する。遠江IV期であろう。

22はフラスコ型瓶である。体部の形状は横長の楕円形を呈し、頸部及び体部の蓋部分は欠失している。外面はケズリ調整が施される。体部中位には浅い1条の沈線がつく。遠江IV期前半からIV期後半の範疇



第18図 石室床面出土土器

に含まれる。

23は、フラスコ型瓶である。頸部は短く、体部に対し頸部径は小さい。頸部上位は外反し、段差が認められる。口径は9.9cmで口縁端部は三角形に仕上げられる。体部は横長の球形を呈し、外面は自然軸が付着する。外面の蓋部分は丁寧なナデ調整が施されるが、内面には円形の蓋を接合した痕跡が明瞭に残る。遠江IV期前半から後半の範疇に含まれるが、短い頸部、球状を呈することからやや新しい様相を持つと思われる。

24は摘蓋で受け口径13.2cm、器高2.9cmである。天井部外面はヘラケズリ調整が施される。外面は、自然軸が付着する。摘みの形状は、扁平で摘み径は、3.0cmである。返りは受け部よりわずかに突出する。遠江IV期後半であろう。

25は高杯の坏部である。皿状を呈し断面はやや厚い。口縁部は外方に延び、坏部中位で痕跡程度の段差が認められる。遠江IV期であろう。

26は高杯の脚部である。端部は短く立ち上がる。表面は内外面ともにやや摩耗している。遠江IV期であろう。

27は長頸壺である。口径11.4cm、体部最大径18.6cm、残存高24.5cmである。頸部は八字に広がり、下位に2条の浅い沈線が巡る。体部はやや丸みを帯び、屈曲部には2条の沈線が巡り、それぞれ櫛歯状の刺突文が斜位につく。屈曲部上位には暗黄緑色の自然軸が付着する。体部下半にはヘラケズリ調整が施される。脚部は欠失している。遠江IV期後半であろう。

第4表 出土土器計測表

押出	図番	器種	部位	出土位置	残存率%	口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	焼成	色調	備考
1		摘蓋		墳丘	70%	(9.9)	2.5		堅焼	N 8/0 灰白色	
2		小型高杯	坏部	墳丘南斜面	30%	(10.2)	3.0		堅焼	N 7/0 灰色	
3		坏身		墳丘南斜面	25%	(13.0)	(3.5)		堅焼	10YR 7/1 灰白色	
4	11	坏身		墳丘南斜面	40%	(13.2)	3.4		堅焼	N 8/0 灰白色	
5		坏身	坏部	墳丘	30%	—	(2.8)	—	堅焼	2.5Y 8/2 灰白色	
6		冠形蓋		墳丘	30%	(10.6)	(6.0)	(14.1)	良	N 7/0 灰白色	
7	11	摘蓋		周溝	70%	—	2.8	(13.0)	堅焼	2.5Y 8/1 灰白色	
8	11	摘蓋		周溝	50%	—	3.3	(13.4)	堅焼	2.5Y 8/1 灰白色	
9		摘蓋		周溝	25%	(13.2)	4.75		堅焼	10YR 8/1 灰白色	
10	11	坏身	坏部	周溝	60%	12.5	4.0		堅焼	5Y 7/1 灰白色	
11	11	坏身	坏部	周溝	80%	12.2	4.1		堅焼	5Y 8/1 灰白色	
12	11	坏身		周溝	80%	11.3	3.8	—	堅焼	2.5Y 8/1 灰白色	
13		坏身	坏部	周溝	30%	—	(3.25)	—	堅焼	2.5Y 8/1 灰白色	
14		小型高杯	脚部	周溝	40%	(6.8)	(1.3)		堅焼	N 8/0 灰白色	
15	11	長頸壺	体部	周溝	80%	—	(9.8)	18.3	堅焼	7.5Y 7/1 灰白色	
16		壺	体部	周溝	40%	10.4	—	10.4	堅焼	2.5Y 7/1 灰白色	
17		高杯	坏部	周溝	40%	(15.4)	4.0		堅焼	2.5Y 7/1 灰白色	
18	11	高杯		周溝	90%	16.6	13.3		良	N 8/0 灰白色	
19	11	平瓶	口縁部	周溝	40%	(18.2)	—	—	堅焼	2.5Y 7/2 灰黄色	
20		平瓶	口縁部	周溝	25%	(21.0)	(18.1)		堅焼	2.5Y 7/1 灰白色	
21		フラスコ型瓶	頸部	周溝	80%	(3.9)	(7.3)		堅焼	2.5Y 6/3 にみち黄色	
22	12	フラスコ型瓶	体部	周溝	70%	(17.2)	(19.2)		堅焼	7.5Y 7/1 灰白色	
23	12	フラスコ型瓶		周溝	30%	(9.9)	(16.3)		良	2.5Y 7/1 灰白色	
24	12	摘蓋		石室床面	100%	—	2.9	13.2	堅焼	2.5Y 7/1 灰白色	
25		高杯	坏部	石室内部	70%	(17.0)	(4.6)		堅焼	2.5Y 7/1 灰白色	
26		高杯	脚部	石室内部	30%	(11.2)	(5.3)		良	N 8/0 灰白色	
27	12	台付長頸壺		石室床面	80%	11.4	(24.5)	18.6	堅焼	N 8/0 灰白色	

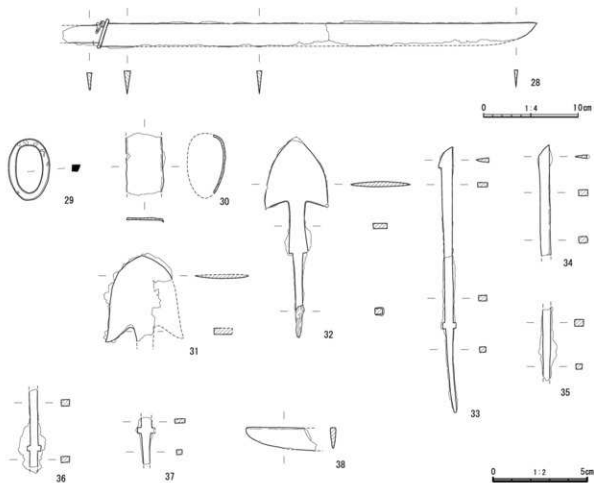
3 金属製品

金属製品は、15点出土し、11点を図化した。28は大刀で、残存長50.0cm、刀身長46.1cm、刀身幅2.4cmで茎尻・目釘穴は欠失している。切先はカマス切先で棟の厚さは0.8mmである。茎間は直角間である。柄部にはわずかに木質が残存していた。柄間金具は真金具から0.8cmで1条分が残存していた。断面は蒲鋸形を呈する。29は真金具で銅製である。わずかに鍍金が認められた。倒卵形で長径3.2cm、内径2.4cm、幅0.4cmで、断面形状は台形である。30は鏝である。長さ3.2cm、幅1.9cmで倒卵形を呈する。裏面には木質が遺存していた。

鉄鏝は、平根式2点、尖根式2点、棘間をもつもの2点、鉄鏝片1点である。31は、平根式腸袂柳葉鏝で鏝身先端から緩やかに弧を描く。鏝身長に対し鏝身幅は広い。片側は欠損し、さびぶくれにより、断面は不明瞭である。32は、平根式腸袂三角形鏝である。鏝身先端から緩やかな弧を描く。全長10.6cm、鏝身部は長さ3.6cm、鏝身幅3.2cmである。断面は両丸造りである。間は角間である。

33は尖根式片刃箭鏝である。鏝身間は直角間で鏝身長は1.1cmである。刃部は先端部のみである。全長14cmで、完形である。棘間を有し、断面は長方形を呈する。34は尖根式片刃箭鏝である。残存長5.9cmで、鏝身部は明確な間を持たないタイプである。

35は鉄鏝片である。残存長3.9cmである。36、37は棘間をもつ鉄鏝である。36は残存長4.15cmである。わずかに木質が観察される。37は残存長2.55cmである。38は刀子である。茎部は欠損している。残存長3.7cm、刃部幅1.2cm、棟の厚さ0.3cmである。



第19図 石室床面出土金属製品

4章 自然科学分析

1節 炭化材同定

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

唐沢古墳群（浜松市北区三ヶ日町日比沢所在）は、古墳時代終末期の横穴式石室を持つ円墳である。今回は、検出された炭化材の樹種同定ならびに年代測定を実施し、年代観や木材について検討する。

1 試料

分析試料は、遺跡より出土した炭化材5点である。試料の詳細に関しては樹種同定結果と合わせて第5表に記す。

2 分析方法

炭化材同定は、年代測定の試料調整の際に削り落とした部分を用いる。木口（横断面）・楕目（放射断面）・板目（接線断面）の各切片を作成し、双眼実体顕微鏡や電子顕微鏡で観察する。木材組織の種類や配列の特徴を、現生標本や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

3 結果

結果を第5表に示す。検出された種類は、マツ属複雑管束亜属が4点、クスノキ科が1点である。以下に検出された種類の解剖学的特徴を述べる。

・マツ属複雑管束亜属 (*Pinus* subgen. *Diploxylon*) マツ科

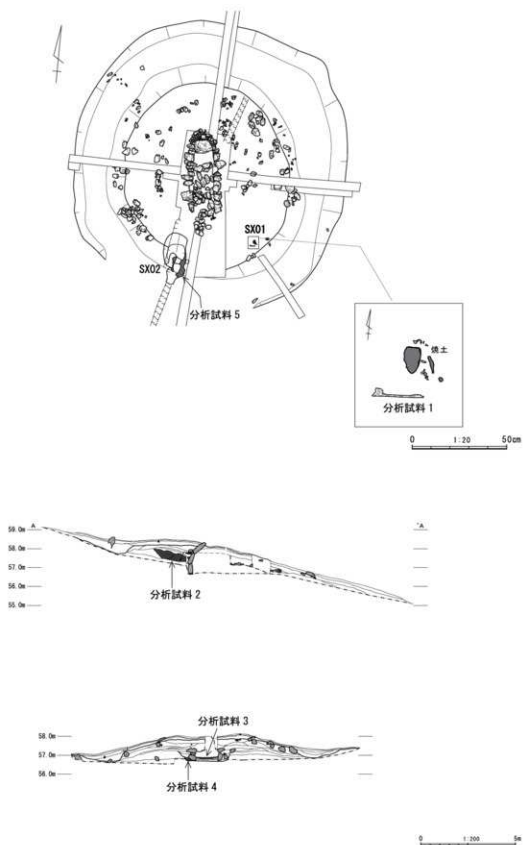
軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや緩やかで、垂直樹脂道が晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道と、樹脂道を取り囲むエビセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

・クスノキ科 (*Lauraceae*)

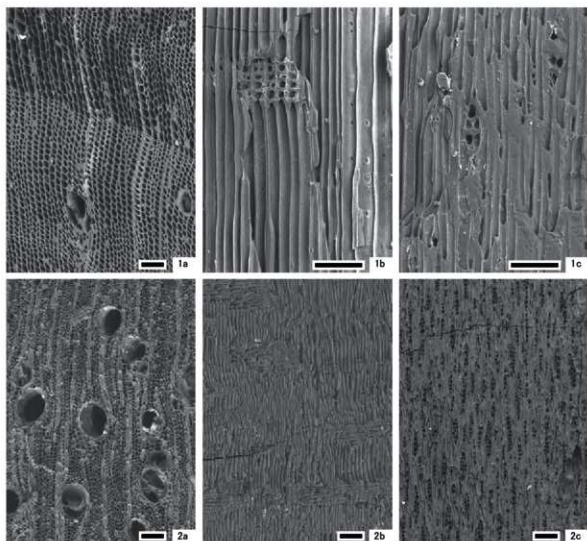
散孔材で管壁は厚く、横断面では楕円形、単独および2～3個が放射方向に複合する。道管は単穿孔、壁孔は交互状。放射組織は異性、1～5細胞幅、1～20細胞高。柔組織は周囲状。

第5表 樹種同定結果

No	試料名	樹種
1	SX01 墳丘南斜面	マツ属複雑管束亜属
2	墳丘内 II-18、II-17層	マツ属複雑管束亜属
3	石室床面	クスノキ科
4	石室裏込（基底部）	マツ属複雑管束亜属
5	SX02	マツ属複雑管束亜属



第20圖 分析試料採取位置圖



1. マツ属複維管束亜属(№1)
2. クスノキ科(№3)

a:木口 b:径目 c:板目
スケール:100 μ m(1-3) 5mm(4,5)

写真9 炭化材

2節 放射性炭素年代測定

バリノ・サーヴェイ株式会社

1 分析方法

炭化材は実体顕微鏡で観察し、周囲を削り落として付着物等を取り除き、50mg程度に調整する。塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1mol/Lである。試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。測定はタンデム加速器をベースとした ^{14}C -AMS専用装置(NEC社製)を用いて、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。 $\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアは、OxCal4.4 (Bronk, 2009)、較正曲線はIntCal20 (Reimer et al., 2020)である。

2 結果

結果を第6表に示す。5点ともに定法での分析処理が可能であり、測定に必要なグラファイトは得られている。同位体補正を行った値は、No.1が1230 ± 20BP、No.2が3640 ± 20BP、No.3が1270 ± 20BP、No.4が1630 ± 20BP、No.5が3520 ± 20BPである。

暦年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、その後訂正された半減期(^{14}C の半減期5730 ± 40年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正用データベースは、IntCal20 (Reimer et al., 2020)を用いる。2σの値は、No.1がcalAD702 ~ 881、No.2が4078 ~ 3889calBP、No.3がcalAD670 ~ 798、No.4がcalAD405 ~ 537、No.5が3875 ~ 3703calBPである。

3 考察

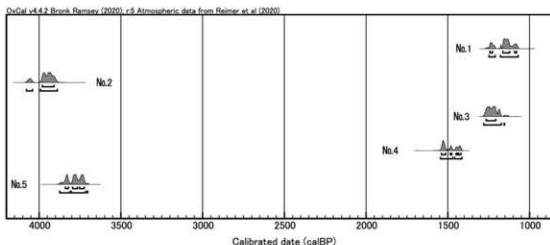
暦年代を第21図に示す。暦年代の結果はばらつきが大きく、No.1とNo.3が古代、No.4が古墳時代、No.2とNo.5は縄文時代後期にあたる。No.4のみが古墳築造と調和的な年代であるが、他の試料に関しては、古い炭化材の再堆積や後代の混入など様々な可能性を考える必要がある。

木材は、5点中4点がマツ属複雑管束亜属である。マツ属複雑管束亜属は瘦地に強く、成長が早い典型的な陽樹である。このため、崩壊地、伐採地、植生が失われた場所に先駆的に侵入し、二次林を構成する。また、尾根沿いや海岸など他の樹木が生育しにくい場所でも生育可能である。遺跡は、海岸に接する潟湖(浜名湖)近くに立地しており、周辺にマツ林が成立しやすい。年代値は、縄文時代、古墳時代、古代とまちまちであるが、どの時代においても周辺にマツ林が存在し、入手しやすい木材であった

第6表 放射性炭素年代測定結果

No.	性状	方法	補正年代 (暦年較正用) BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代							確率 %	Code No.		
					年代値										
1	炭化材 (マツ属)	AAA (1M)	1230 ± 20 (1229 ± 21)	-33.77 ± 0.23	σ	cal AD 708	-	cal AD 724	1243	-	1227	calBP	12.3	IAAA- 200755	pal- 12892
						cal AD 787	-	cal AD 829	1164	-	1122	calBP	48.6		
						cal AD 859	-	cal AD 870	1092	-	1080	calBP	7.4		
						cal AD 702	-	cal AD 740	1248	-	1210	calBP	20.7		
						cal AD 772	-	cal AD 881	1179	-	1070	calBP	74.8		
						cal BC 2032	-	cal BC 1960	3981	-	3909	calBP	68.3		
2	炭化材 (マツ属)	AAA (1M)	3640 ± 20 (3642 ± 21)	-31.05 ± 0.23	2σ	cal BC 2129	-	cal BC 2091	4078	-	4040	calBP	12.1	IAAA- 200756	pal- 12893
						cal BC 2043	-	cal BC 1940	3992	-	3889	calBP	83.3		
						cal AD 685	-	cal AD 743	1266	-	1207	calBP	68.3		
						cal AD 670	-	cal AD 777	1280	-	1173	calBP	94.7		
						cal AD 794	-	cal AD 798	1157	-	1153	calBP	0.7		
						cal AD 411	-	cal AD 436	1539	-	1515	calBP	39.1		
3	炭化材 (クスノキ科)	AAA (1M)	1270 ± 20 (1269 ± 21)	-32.72 ± 0.22	2σ	cal AD 465	-	cal AD 475	1486	-	1476	calBP	9.2	IAAA- 200757	pal- 12894
						cal AD 501	-	cal AD 508	1450	-	1442	calBP	5.8		
						cal AD 516	-	cal AD 531	1435	-	1420	calBP	14.2		
						cal AD 405	-	cal AD 481	1545	-	1470	calBP	63.7		
						cal AD 491	-	cal AD 537	1459	-	1413	calBP	31.7		
						cal BC 1891	-	cal BC 1873	3840	-	3822	calBP	15.8		
4	炭化材 (マツ属)	AAA (1M)	1630 ± 20 (1628 ± 21)	-33.79 ± 0.20	σ	cal BC 1846	-	cal BC 1816	3795	-	3765	calBP	27.6	IAAA- 200758	pal- 12895
						cal BC 1803	-	cal BC 1775	3752	-	3724	calBP	24.9		
						cal AD 405	-	cal AD 481	1545	-	1470	calBP	63.7		
						cal AD 491	-	cal AD 537	1459	-	1413	calBP	31.7		
						cal BC 1891	-	cal BC 1873	3840	-	3822	calBP	15.8		
						cal BC 1846	-	cal BC 1816	3795	-	3765	calBP	27.6		
5	炭化材 (マツ属)	AAA (1M)	3520 ± 20 (3517 ± 24)	-31.93 ± 0.20	σ	cal BC 1803	-	cal BC 1775	3752	-	3724	calBP	24.9	IAAA- 200759	pal- 12896
						cal BC 1926	-	cal BC 1862	3875	-	3811	calBP	28.7		
						cal BC 1856	-	cal BC 1766	3805	-	3715	calBP	66.4		
						cal BC 1757	-	cal BC 1754	3706	-	3703	calBP	0.3		
						cal BC 1891	-	cal BC 1873	3840	-	3822	calBP	15.8		
						cal BC 1846	-	cal BC 1816	3795	-	3765	calBP	27.6		

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期 5668年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68.2%が入る範囲)を年代値に換算した値。
- 4) AAAは、酸・アルカリ・酸処理、Aaはアルカリの処理を薄くした処理を示す。
- 5) 暦年の計算には、OxCal v4.4を使用。
- 6) 暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用。
- 7) 較正データベースは、IntCal20を使用。
- 8) 較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 9) 統計的に真の値が入る確率は、 σ が68.2%、 2σ が95.4%である。



第21図 暦年較正結果

と思われる。浜名湖の花粉分析結果をみても、縄文時代以降、表層までマツ属が優勢な組成を示している (Matsushita and Sanukida, 1988)。一方クスノキ科は、海岸近くの温暖な場所に生育することから、周辺に生育していたと思われる。なお、クスノキ科は花粉外膜が弱いため、花粉分析を行っても化石としては検出されない。

引用文献

- Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51, 337-360.
- 林 昭三, 1991, 日本産木材顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. *木材研究・資料*, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. *木材研究・資料*, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. *木材研究・資料*, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. *木材研究・資料*, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. *木材研究・資料*, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久 (編) 2012 木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社, 449p.
- Matsushita Mariko and Sanukida Satoshi, 1988, Holocene Vegetation History around Lake Hamana on the Pacific Coast of Central Japan. *The Quaternary Research*, 26, 393-399.
- Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J., Turney, C., Wacker, L., Adolphi, F., Buengen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S., 2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal BP). *Radiocarbon*, 62, 1-33.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘 (日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- Stuiver M., & Polach A.H., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of ^{14}C Data. *Radiocarbon*, 19, 355-363.
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

5章 総括

1節 まとめ

今回の調査では、横穴式石室墳1基を確認することができた。周辺の試掘確認調査の成果や地形等から判断して当該地には古墳が密集して分布しているような状況とは考えにくく、数基程度の群構成からなる古墳群であったと考えられる。

墳丘 唐沢1号墳の墳丘は径8.9m高さ1.45mで、2重の墳丘内石列、外護列石を有していた。遠江では、墳丘内石列、外護列石を有する古墳は少なく、湖西市神座古墳群、浜松市大屋敷C古墳群、浜松市見徳2号墳、磐田市新平山B5号墳、17号墳、島田市水掛古墳群などが挙げられるに過ぎない。

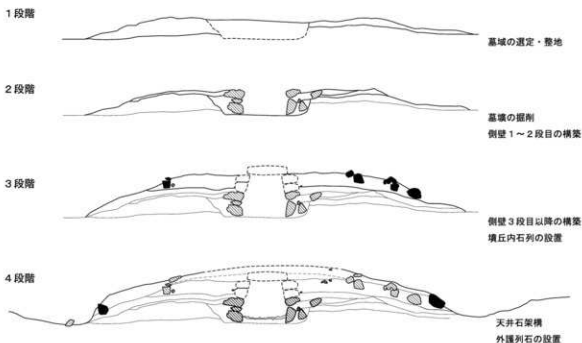
唐沢1号墳は2重の墳丘内石列や外護列石の両方の構造を持つ古墳として遠江では初例となる。石室、外護列石、墳丘内石列の石材はチャートを含む角礫で構成される。

外護列石、墳丘内石列の両者を有する古墳は、豊川市膳棚4号墳、豊橋市下振1号墳、豊橋市稲荷山3号墳で確認されている。豊橋市域を含む浜名湖北岸一帯は、角礫を多く入手できる環境でもあり、盛土の土は、粘性を欠き、砂質を主体としているため、盛土崩落防止のため、墳丘構築にも石を多用したことであろう。

今回の調査では墳丘内石列の存在から石室構築と墳丘構築が連動して行われていることが明らかになり、横穴式石室の構築法を示す一例となった。以下、墳丘構築と石室構築の関係を図示する。

1段階：墓域の選定・整地

古墳の築造には、墓域の選定から始まり、唐沢1号墳の場合は、古代の本坂通、浜名湖を意識した日比沢川沿いの緩やかな斜面を選地したと考えられる。古墳築造時の整地層からは、炭化物が見られたことから焼き払いを行い、旧表土を削り整地したと考えられる。



第22図 墳丘盛土と石室の関係

2段階：墓壇の掘削・側壁1段目から2段目の構築、水平盛土

基底石を据えるための浅い墓壇を掘削し、基底石を据えたと考えられる。裏込めには土を入れ、側壁2段目から薄く水平に盛土している様子がうかがえた。

3段階：側壁3段目以降の構築・墳丘内石列の構築

側壁3段目から側壁最上段まで傾斜をつけながら盛土していく。このとき、2重の墳丘内石列が設置され、内側の墳丘内石列は石室構築のために小墳丘状を呈し、丁寧に作られていた。このときの古墳の形状は長楕円形であった。一方、外側の墳丘内石列は、散漫な状況ではあるものの、楕円形を呈し、墳丘盛土の崩落防止として設置されていたと考えられる。

4段階：天井石架構・外護列石の設置

天井石を載せ、さらに盛土を施し、外護列石を整備して古墳は完成する。開口部付近の溝溝内から多くの石が見られたことから開口部付近を中心に列石が設置されていた可能性が高い。

今回の調査では墳丘内から構築時に伴う土器が出土していないことから儀礼の様子をうかがい知ることではできなかったが、三河地域の墳丘内石列を有する横穴式石室墳においては墳丘裾や墳丘内石列の脇で儀礼が行われていた事例が多いとされる。

石室 開口部の遺存状況は良好ではないが、残存長3.8m幅1.2mの無袖式石室であると考えられる。石室床面は2面確認し、遺物は2次床面のみから出土した。古墳は7世紀後半に築造、追葬が行われていたと推測される。また、石室床面から出土した炭化材の年代測定についてもcaAD670～798を示しており、後世の盗掘・擾乱は考慮するものの、築造時期について大きな齟齬はないと考えられる。

副葬品 遺物は2次床面からは須恵器坏蓋、長頸壺、立てかけられた大刀1点、尖根式片刃箭鏃2点、平根式腸挟三角形鉄2点が出土した。床面からの遺物量は少ないものの、破壊された開口部、溝溝内から須恵器坏蓋、高坏、プラスチック型瓶、平瓶などが複数出土しており、石室内や石室周辺等での墓前祭祀使用されたと考えられる。須恵器はすべてが湖西窯産で構成される。

武器は大刀、鉄鏃が出土した。大刀は2次床面時に切先を下に向け、側壁に立てかけられた状態であった。これは2次床面設置の際の片づけ時に置かれたものと思われる。柄頭の形態は不明であるが、大刀は金鋼装の責金具、柄間金具を有する飾大刀であった。

鉄鏃は尖根式、平根式ともに少なくとも2点ずつ出土した。平根式は腸挟三角形で、尖根式は片刃であり、鉄鏃は少種少量の副葬といえよう。近隣の6世紀後半に築造された上尾奈古墳群では平根式5点と尖根式2点の鉄鏃が出土している。浜名湖沿岸地域における鉄鏃の形態的特徴や時期的変化を追うには資料不足であるが、遠江IV期に入ると鉄鏃の少量副葬の傾向は遠江地域と同様であろう。

このように墳丘規模、石室形態、副葬品から在地的特徴が顕著であり、浜名湖北岸域における有力家層と評価することができる。

今後の課題 今回の調査では墳丘内石列の配置と石室との関係性をとらえることができた一方、石室開口部が擾乱により破壊されていたため、前庭側壁の構築や開口部列石などの構築の際には、側壁構築時とは異なる墳丘盛土築成法を想起させることになった。

遠江地域における開口部石列や前庭側壁の構築が、長泉町原分古墳に見られるように側壁構築とは別に石室前庭部が付加され、墳丘盛土を貼り付ける築成法が施されているのか類例に期待したい。

今後、石室の形態的变化や副葬品の構成など東三河との関連や調査が進展している三方原台地における古墳群の特徴を比較することで、この浜名湖北岸域における古墳群の特質の一端を明らかにすることができよう。

写真図版



1 調査前状況（北東より）



2 調査前状況（南より）

図版 2



1 表土除去後の状況 (南より)



2 周溝検出状況 1 (奥壁側)



3 周溝検出状況 2 (左壁側)



4 遺物出土状況 1



5 遺物出土状況 2

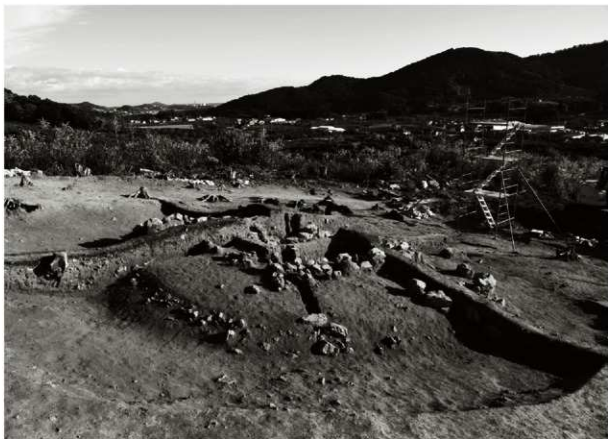


1 外圍列石検出状況（北東より）



2 周溝内礎検出状況（南東より）

図版 4



1 墳丘内石列検出状況1 (北西より)



2 墳丘内石列検出状況2 (北東より)



1 東西墳丘土層堆積状況（南より）



2 奥壁側 墳丘土層堆積状況（西より）

図版 6



1 右壁側 墳丘土層堆積状況 (南より)



2 左壁側 墳丘土層堆積状況 (南より)



1 墳丘検出状況 (南西より)



2 天井石検出状況 (北西より)



3 石室検出状況 (南より)



4 開口部遺物出土状況 1



5 開口部遺物出土状況 2



1 石室床面遺物出土状況（南より）



2 大刀出土状況（南東より）



3 須恵器坏身出土状況（南東より）



4 鉄鏝出土状況（東より）



1 右壁検出状況 (南東より)



2 左壁検出状況 (南西より)



1 基底石検出状況（南より）



2 基壇検出状況（南より）





報告書抄録

ふりがな	からさわこふんぐん							
書名	唐沢古墳群							
副書名	令和元年度～2年度 畑地帯総合整備事業（担い手支援型）三ヶ日みかんの里地区の農地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第62集							
編著者名	井鍋啓之 パリノ・サーヴェイ株式会社							
編集機関	静岡県埋蔵文化財センター							
所在地	〒421-3203 静岡県静岡市清水区蒲原5300番5号 TEL 054-385-5500（代）							
発行年月日	2021年2月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町	遺跡番号					
からさわこふんぐん 唐沢古墳群	ほらさわこふんぐん 浜松市北区 ふらさわこふんぐん 三ヶ日町日比呂	22202		34° 49′ 37″	137° 31′ 12″	20190704～ 20200305	625㎡	記録保存調査 （農地整備）
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
唐沢古墳群	古墳	古墳時代	横穴式石室1基 不明遺構2基	須恵器27、大刀1 鉄鏝6、刀子1		直径8.9mの円墳で外濠列石、墳丘内石列を検出。埋蔵施設は胴張りを呈する無袖式石室		
要約	<p>唐沢1号墳は遠江IV期後半に築造された直径8.9m、残存高さ1.45mの円墳である。墳丘構造は2重の墳丘内石列、外濠列石を有する。石室は残存長3.8m、石室幅1.2m、残存高さ1.2mを有し、胴張りを呈する無袖式石室を検出した。石室床面は、2面確認し、遠江IV期後半に2回の埋葬が行われたと考えられる。副葬品は遠江IV期後半の須恵器壺蓋、坏身、フラスコ型瓶、高坏などが出土し、湖西産産である。大刀は胴壁に立てかけられた状態で出土し、大刀の黄金具は金銅装であった。鉄鏝は、平根式櫛状三角形鏝1点、平根式櫛状柳葉鏝1点、尖根式片刀箭鏝2点が出土した。小規模な古墳ながらも墳丘内石列、外濠列石を有し、簡大刀をもつことから浜名湖北岸における有力家長墓を想定した。</p>							

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第62集

唐沢古墳群

浜松市

令和元年度～2年度 畑地帯総合整備事業（担い手支援型）

三ヶ日みかんの里地区の農地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

令和3年2月26日発行

編集・発行 静岡県埋蔵文化財センター

〒421-3203 静岡県静岡市清水区蒲原5300-5

TEL 054-385-5500（代）

FAX 054-385-5506

印刷所 みどり美術印刷株式会社

〒410-0058 静岡県沼津市沼北町2丁目16番19号

TEL 055-921-1839（代）

FAX 055-924-3898